
愛おしさという名の感情

竹仲法順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛おしさといふ名の感情

【ZPDF】

Z3631D

【作者名】

竹仲法順

【あらすじ】

ボクと有希は都内のマンションで同棲生活を送り続けていた。互いに籍を入れずに生活し始めて二年になる。ボクは都内にあるIT企業に勤め、家にいる有希は代わりに家事をやってくれていた。七月のある日、ボクは有希から意外な事実を聞かされるが……。

*

「隆志」

「何? そんなに改まって」

「あたしのこと、愛してくれてる?」

「もちろんさ。君のことはいつも想つてるよ。忙しい仕事中でもね」

「嬉しい」

ボクと有希はテーブルで朝食を取りながら、何気ない話をしていた。

ボクと有希は一年前から都内のマンションで同棲生活を送り始めた。月日を経て一人ともすっかり仲良くなり、お互いぎすぎすしない空気のような存在になっている。だが、なぜか籍はまだ入っていない。楽しい生活を送っているので、結婚生活という堅苦しいもの避けたいというのが一人の本音だったのだ。

ボクは七月のとある日、寝室のベッドから跳ね起きると、クローゼットに歩いていき、半袖のワイシャツに袖を通した。

そして上下ともパリツとしたスーツに着替え、出社の準備を整えた。有希は普段から家にいて、家事や炊事、洗濯など、いわゆる主婦業をやってくれている。ボクは有希のおかげで、安心して仕事に励むことが出来た。

オフィスは新宿にあり、マンションがある中野から中央線で一本だ。

有希はボクより少しだけ遅く起き、朝食を作ってくれた。出された朝食を取り終えたボクが、カバンを持って、

「行つてくるよ」

と言い、そのまま颯爽^{さっそう}とマンションを出た。

駅に着くと駅構内に差し込む日差しが暑く、気温もだいぶ上がっていた。

新宿方面の通勤電車に乗り込むと、乗客は皆半袖シャツを着て、吊り革や手すりを握っている。

ボクはその日、早めに家を出、時間に余裕を持って、ゆっくりと通勤した。

新宿駅に降り立つたボクは、そのまま駅から徒歩で十分ほどの場所にあるオフィスを目指す。

午後八時半に出勤し、会社のフロアーに入つて、そこにいた同僚社員たちに「おはよう」と挨拶した。

ボクの会社はビルの一室を借り受けて営業するIT企業だった。規模は小さく、社員も数人しかいない。

自分のデスクに座つたボクはパソコンを立ち上げてネットに繋ぎ、フリーのメールボックスを開いて、メールをチェックした。

スパムが多く、それらを全て削除し、業務連絡などのメールに目を通す。その作業が終わると、ボクは今年の夏、社を上げて企画するオンライン上のページを作成し始めた。

作業は午前中の三時間あまりで終わり、データのバックアップを取ると、ボクは同僚社員の白川と一緒にランチに出かけた。

白川は新宿近辺の地理に詳しく、裏通りに隠れるようにしてある、人気のランチ専門店にボクを案内した。

ボクたちは込んでいる店内を眺めながら、店の外で丸々一時間ほど待つて、順番が来ると、店の中に入つていった。

白川が席に座ると、

「日替わりでいいよな？」

とストレートに訊いてきたので、ボクが頷く。

ボクたちは近くにいたウエイトレスに、日替わりを一つとアイスコーヒーを一杯注文し、寛ぎ始めた。

白川がポケットからタバコを取り出し、銜え込んで先端に火を点つけ、吸い始める。たちまち煙が上がり出した。

「おいおい、この時間帯禁煙なんじゃないか？」

ボクがそう言うと、白川が、

「見てみろよ。皆吸つてるぜ」

と返し、再びスパスパやり始めた。確かに、店内にいる客は七割方がタバコを吸っている。

日替わりがテープルに来て、白川はタバコを灰皿で揉み消し、ボクたちは食事を食べ出した。

大きなハンバーグに大盛りのライスと野菜サラダ、それにコンソメスープが付いている。ボクたちは食事を取りながら時折顔を上げて、店内を見渡す。

店の中は午後一時前とあってか、ランチタイムはすでに終わつたらしく、座席は埋まつていてるもの、待つていてる人たちはいなかつた。

ボクたちは食事が終わると、アイスコーヒーを飲み、しばらくの間椅子に座り込んでいた。

時間が流れ、午後の仕事の時間になる。

ボクたちは席を立つて、レジで各自食事代を清算すると、店外へ出た。

相変わらず日差しが暑かつた。真夏で、太陽は遠慮なしに照り続ける。

ボクたちは会社に向けて歩き出した。

スタミナを付けるために大量に食べたからか、午後の時間帯は一際眠かつた。

会社に戻ると、午後の仕事が待つている。

その日の夕方。

濃いコーヒーで眠気を振り払つたボクは仕事を終え、仲間たちと飲まずに、まっすぐに有希が待つ中野の自宅マンションへと帰つた。

午後八時過ぎ。

ボクは帰宅した。

*

「お帰り」

「ああ、ただ今」

「食事出来るわよ」

「あ、そつ。ちょっと先にシャワー浴びてくるよ。汗だくなんだ」
ボクが帰宅早々、玄関先で有希と会話し、ゆっくりと風呂場に入つていつた。

脱衣場でシャツとスラックスを脱ぎ、シャツは汚れ物入れに入れ、冷たいシャワーを浴び始める。体が一瞬にして冷え、気持ちよかつた。

ボクはシャワーを浴びて汗を洗い流し、髪の毛や体を洗つて洗顔も済ませると、持つてきていた着替えの半袖シャツに着替えた。
そして短パンを穿き、風呂場から出る。

有希がテーブルに三百五十ミリ入りの缶ビールを一本用意してくれていた。お互い、夕食時は必ず一本ずつ飲むのだ。

有希が、

「今日の夕飯はね、豚カツ」

と言い、揚げたてのカツを二人分と、千切りしてドレッシングで和えた野菜を皿に盛つた。

二人で食事を取り始めた。

有希が茶碗によそつたご飯を食べながら、不意に驚くべきことを言い出した。

「あたし、妊娠してるの。今日近くの産婦人科で診てもらつたら、お腹の中に子供がいるんだって」

「妊娠？」

「うん。来年の五月にはあたし母親になるの」

「そう……」

ボクは言葉尻に含みを残しながらそつ言い、言つた後、
「正式に籍入れようよ」
と重ねて言つた。

「うん」

有希が頷き、淡々と食事を取り続けた。

ボクは自分に血を分けた子供が出来たことを知り、急に嬉しくな

つた。

その夜。

東京は熱帯夜だった。蒸すよつに暑く、冷房を入れても眠れない。ボクは有希と抱き合つたまま、深夜の遅い時間に眠りに落ちた。そして朝が訪れ、早めに起きたボクは、出社する前に中野区役所に自分たち二人の入籍を届け出た。

*

それから約十カ月後の翌年五月。

有希は産婦人科の病院で、無事男の子を出産した。保育器の中には、新しい命が眠つている。

有希がベッドに横たわつたまま、

「名前、何にしようか？」

と言つた。

「そうだな……じゃあ、夏で空が青い時に生まれたから、夏に青いで、青夏^{せいじか}つていうのはどう？」

「青夏。いい名前ね。じゃあ、早速その名前を区役所に届け出で」「分かつた」

ボクが領き、再び保育器の中にはいる生まれたばかりの命をじつと見つめた。

青夏は生まれたてらしく、赤い顔をしている。

ボクはそれから区役所に行き、出生届を出した。

ボクたち二人の愛の結晶である青夏は順調に育つていった。

やがて暑い夏が訪れる。

ボクは通常通り仕事に精を出し、退院した有希は青夏を連れて、自宅で育児を始めた。

時折、有希はベビーカーに青夏を乗せて、散歩に出かける。

子供が出来たボクたち一人には、愛おしさという名の感情が徐々にではあるが募り出し、幸せそのものだった。

青夏はすくすくと育つていく。

ボクは休みの日はなるだけ有希や青夏と一緒に過ごす時間を作つ

た。
縁が生い茂り、空も青く、田雲^あが棚引く鮮やかな季節が田に眩しい。

ボクたちはややかではあるが、幸せだった。

“この幸せが壊れませんように”

ボクは毎朝家を出るたびにそつ願っていた。

時間はゆっくりではあるが着実に流れ、季節が移ろっていく。

(ア)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3631d/>

愛おしさという名の感情

2010年10月12日00時57分発行